

浄

monthly
JŌDO

土

January 2009

1



法然上人鑽仰会



〔朝露の中のトンボ〕写真・井上博道
「人間は環境の子である」本誌6ページより

呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った作品。

1月号『寿唐子』

信州佐久

西念寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

紀行 寺院



一行山無量壽院西念寺の本堂。晋山式での記念写真(右)、東谷健昭第二十六世住職、康子夫人、ご夫妻の間に長男の健徳君、右端が次男の健純君、ひとり前に立つのが三男の健信君



西念寺本尊阿彌陀如来像は藤原末期の定朝様式
をしめす半丈六の座像で県宝に指定されている



西念寺堂内法要にて導師をお勤めいただく浄土宗
大本山信州善光寺大本願法主鷹司監玉台下



法類総代の西蓮寺上人から弘子を受け取る
東谷健昭新住職



本堂前の庭儀式での洒水作法を執り行う新住職。本尊と結ばれた五色の糸がたなびいている



お練行列で新住職のあとに従う寺族



浅間会館から始まった練り行列。向うに信州の山々が見える



浄土宗大本山信州善光寺大本願法主應司
誓玉台下が本堂前に記念の植樹をされた



書院式は組内の諸大徳により行われた

浄土

2009/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 信州佐久 西念寺.....	撮影=タカオカ邦彦	1
人間は環境の子である	井上博道	6
新連載 小説快僧渡辺海旭『壺中に月を求めて』	前田和男	14
寺院紀行 信州佐久 西念寺.....	真山 剛	20
会いたい人 妹尾河童さん②	関 容子	28
江戸を歩く 第二十三回	森 清鑑	36
響流十方	小村正孝	40
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	51
編集後記.....		52



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

人間は
環境の
子である

井上博道



井上博道先生の生涯と業績を
追った。著者：井上博道先生
の弟子。発行：井上博道先生
の弟子。

夕焼けこやけで日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る……

夕焼けこやけの赤トンボ……

今、辞書に、「こやけ」という言葉が記載されていないのを變だと思っています。自然風景を撮影していると、日没後の四、五分したところ、西の空が急に紅色に染まります。私はこれが「こやけ」と思っています。

私の少年時代はこの日没に合わせて、夕べの鐘をつくのが長男の義務で、除夜の鐘や火事など非常の鐘は親父と二人でついたものです。

子供時代、私を可愛がってくれた檀家の人が亡くなり、葬式のあった夕べに見事な夕焼けを見て、鐘の数を間違えた数日後、田畑で働いている檀家のお年寄りから注意されたものでした。というのは、どんなに好きだった人が亡くなっても、美しい夕焼けにそまった西山のシルエットは変わることはなく、もし自分が死んだとき、せめてシルエットの山の一部が悲しんで欠けてくれたら……と考えていた変な子供でした。

小学校五年生の春、剃髪して得度、幼名博道ひろみちから僧名として博道と呼名が替まりました。以後我が家の仏事をはじめ、法類の手伝いに行き、お小僧様と書かれたお布施を頂くと、とても嬉しかったのを覚えています。ただ、同級生のいる檀家の法事に行くのは苦手でした。ケンカをした時、「坊主まるもうけ」と言われるからです。

私は、昭和六年（一九三一）日本海に面した兵庫県美方郡香美町（元 香住町）の半農半漁の町の小さな禅寺に生まれました。

日中戦争、第二次世界大戦そして旧制中学一年の夏敗戦、国や大人たちは大変だったらしいですが、田舎のくらしは食糧難の影響も少なく、安穏な日々を送っていました。

昭和二十九年、京都の龍谷大学に入り、我が禅寺の本山 南禅寺に下宿。当時の大学は学生数が千人足らずで、九十九パーセントは寺院の子弟でした。二回生の時友人に誘われ、カメラも持っていないのに、写真部に入学してしまいました。以後部員たちのカメラを強引に借用、いやがる友人や学会の記念写真を写してアルバイト。半年ばかりで、マイカメラを手中にする事が出来ました。蛇腹のカメラで、今も大切にしています。

当時学舎は西本願寺と隣合せて、図書館や研究室は寺の境内にありました。学生服と龍大の帽子を被っていたら、本願寺の中はほとんどフリーパスだったので、夢中になって建物や境内を撮っていたら、寺の雑誌編集から声がかかり、アルバイトをする事になりました。今も刊行している「大乘」です。

鬼の青木編集長と、文字校正で私がミスすると一字二円払い、青木氏のミスを発見したら一字五円頂くルールがありました。私の全敗でした。そこへ時々、ゴマ塩頭の新聞記者 福田さん（後の司馬遼太郎）が見えていて、戦後京都で青木氏と一緒に新聞社におられたが、やがてつぶれてしまい、青木氏は西本願寺出版へ、福田さんは産経新聞京都支局へ入社されました。いつも楽しそうに話して来ていて、時々本願寺の雑誌や新聞用に掲載する私のカット写真を二人で見えておられ、とても嬉しく思いました。

その後、福田さんは大阪の産経新聞本社へ行かれ、私は卒業しても写真の仕事が面白くてあきらめきれず、本願寺の職員に登用してもらい仕事もさることながら、この一年間は各所のコンテストをはじめ夢中で写真にのめり込んで行きました。

田舎の檀家とは父親を通して、南禅寺で修行をしているように繕ってもらい、とうとう翌二十九年司馬さんのおられる産経新聞社の写真部に入社してしまいました。突然辞める事

になった本願寺からは随分しはれましたが、青木編集長だけは喜んでくれました。

入社後はもう夢中の毎日、日本は右肩上がりでもバブルに向かって突進の時代を迎えつつありました。新聞も頁数が多くなり、活気にあふれ充実した紙面が求められていました。

入社三年目の或る日、文化部のデスクをしておられた司馬さんからバーラーに来るようと呼ばれ、当時少し高価だが、バナナとミカン入りのミックスジュースが飲めるのを期待して飛んで行きました。私の学生時代は、「ウドン食おうか」が口グセで、学食でござってもらうこともよくあったのです。

話は「文化欄で毎週一回連載する写真をやってみたいへんかー」それ何ですかの問いに「タイトルは美の脇役。君が学生時代本願寺でよく撮っていたやろーあれや。どや、新聞企画では画期的なもんやで。だから君が見ていた日本文化の中における形としての『美の脇役』。例えば大将はおいといて、その下における参謀とか、その辺のいい奴を掴まえて、それを取り上げるんや」

或る日、二条城の東大手門の釘隠しを持って行ったら「わあ、綺麗や。おっぱいみたいやなあー」

この連載は百回目が過ぎた時、一冊の本にまとめられ、又、近年他社で文庫本にもなり、これが私の生涯を決める写真集となりました。

写真部内で私のあだ名は「お寺はん。コロシやでー」陰では「クソ坊主」？

夢中で新聞社に勤めているうちに、田舎では檀家の人達を怒らせてしまい、両親も大阪にひきとり、皆さんに大変な不義理をしてしまいました。

「美の脇役」のおかげで先輩や後輩のいる色々なお寺に行く機会も多くなり、この出版社、

淡交社から「室生寺」をはじめ十一冊の寺がらみの出版を重ねてきました。

寺と離れて五十年以上過ぎても、益々寺社の方へ身体が向いてしまうのは何だろうと思っています。最近、仏さんのことを「仏像」なんて言いますが、私たち子供の頃は「マンマンチャン」で非常に身に近く、親愛の情で接していました。像なんてつくと、仏さんが美術品になったようで少なからず抵抗があります。何も、博物館や美術館が悪いと言っている訳ではないのですが……。

これまでに本当に多くの仏さんを撮ってきました。

私はまず、仏さんの前に立つたら撮影前に手を合わせ、禅寺日課経より般若心経か、観音さんがおられたら観音経の後半、世尊偈をとえます。これは誰のためではなく自分自身のためでもあります。まず心が静まります。そして、これから写す仏さんの角度とかライティングを考え、どうしたら仏さんに喜んで戴けるかと、あたかも人のポートレイトを撮るような気分です。

気がつくとお経が堂々巡りをしていて、終わりがなくなり思わず鐘をたたいたりして誤魔化しています。お盆の時の大施餓鬼や、春の大般若会の経めくりも大好きです。

新聞社をやめて、結婚し神戸に住んでいる頃、関西の優秀な写真家はつぎつぎに東京へ進出して成功している姿を見て、私も東京へ出てみようか、と思ったことがありました（能力もないのに）。それは、有名出版社が皆、東京に集中しているからです。

ある時、司馬さんのお宅でうどんをよべながら、有名作家司馬遼太郎さんに相談したら、沢山仕事が出来るだろうとの下心ありで、相談したら一言。「お前アホちゃうか！」の一喝。「東京には東大寺も唐招提寺も室生寺もないで……」

そして家内の郷里、奈良へ引越し今年で三十一年になります。

ドキュメンタリー「東大寺」では、華嚴思想の原点となる、大仏様のエネルギーを感知できた喜びは生涯忘れることはないでしょう。

「華嚴」とは難しい理念は別として、ひっくり返るめて言えば、「この世の中に存在するすべてのものは、影響し合って、上も下もなく、お互いが輝いて今を生きている姿」といいます。そうすると、自然界と同じではないかなと思いました。しかし、今世界は人類がそのバランスを崩しつつあります。私が子供の頃、育った自然環境は戦争以外、本当に恵まれた月日でした。

近年「万葉集」を映像化しつつありますが、特に奈良は自然を含めて、古代からの純粋な心の営みが、仏教思想を背景に脈々と受け継がれて現在に至っています。

例えば、初期万葉歌人 柿本人麻呂は「挽歌」の名人で、皇族たちに重用された人です。現代的にいうならば、私の親父が葬式で死者に引導をわたす時の偈の言葉と同じだと思っています。その一方、妻の死を悼んで詠んだ歌の純粋で透明感に満ちた悲しみに心をうたれます。難しい仏教經典の講釈よりはるかに明快な思想表現だと思っています。

最近万葉集からうける人間の「生死観」については、自分の加齢と共に変化してゆきます。修二会の火をもうあと何回見られるとか、家内と夕食を何回食べられるとか、平城京の夜明けを、春日奥山の落葉を、野山の虫たちとは……と、加速的に自分の身邊に何ものかがせまって来ます。

最近、親しい写真仲間に関連られ、山中の休耕田に住んでいるトンボを撮りに行きまし
た。三年程放置され、米と雑草が共生して自然返りしつつある棚田でした。十一月の少し

冷え込んだ早朝で、そここに白く朝露をまとったトンボが枯草に留まっていた。やがて、太陽光で羽根が乾き、最後に少し残った露をバラバラと振り払いつつ飛んでいきました。

次の日に又、一人でマクロレンズを持って行きました。露の重さで少々指で触れても飛び立たず、じっと留まっています。レンズいっぱい接写して見たら、何と綺麗。夜明けの光に露が宝石のように輝き、こんな美しい棺桶があったら入ってみたいなあーと思いました。

このように撮っているうちに、二匹を入れてみたいと思い、そつと一匹を指でつまみ、生きている時は草を掴むのですが、どうしてもこの一匹が草を掴まず、指を離したらポトッと落ちてしまいました。アツと思ったら、彼は亡くなっていたんです。

いやあ、トンボは凄いな！死を迎え、慌てず騒がず誰にも迷惑をかけず、何と美しい静かな死であらうかと、せめてトンボに爪の垢があれば煎じて飲みたいと思いました。

華嚴の華、唯心の華の中でトンボはその生涯を次代へバトンタッチして終わっていったわけです。自分もトンボにあやかりたいなあ、でも不可能ですね。

死は人間にとって永遠のテーマであり、あの世に至ってはじめて覚醒（禅では悟）するのかなあ、と思っています。せめて生ある間は、好きな「万葉集」をベースに、写真によるドキュメンタリー、奈良を撮り続けたいと思っています。

寺をはなれたつもりが、自然との付き合いが深くなれば深くなるほど、悪口を言いながら、寺社詣が繁くなっています。

やはり、人間は環境の子です。

井上博道略歴

1931年 兵庫県城崎郡香住町香住(現:美方郡香美町香住区香住)に生まれる
1950年 兵庫県立豊岡高等学校卒業
1954年 龍谷大学文学部仏教史学科卒業
1955年 産経新聞社大阪本社編集局写真部入社
1966年 フリー写真家となる
1983年 大阪芸術大学写真学科勤務
1988年 (有)井上企画・幅 設立
1991年 龍谷大学より龍谷賞を受賞
1997年 大阪芸術大学写真学科退職
現在 奈良を中心に活躍中

主たる所属団体

日本写真家協会(JPS)会員・奈良市美術家協会会員

主著

「東大寺」	中央公論社	「奈良・大和路」	京都書院
「奈良万葉」	奈良市	「日本の壁」	駿々堂
「隠れた仏たち」	学生社	「日本の庭園」	講談社
「室生寺」	淡交社	「大和路の野の花」	文化出版局
「日本名建築写真選集(東大寺)」	新潮社		
「やまとのかたち」「やまとのこころ」	講談社		
「奈良万葉」全6巻	光村推古書院		
『「飛鳥」「山の辺」「平城京・西」「平城京・東」「葛城」「吉野」』			
「万葉集」	ビエ・ブックス(英訳 リービ英雄 写真 井上博道 アー トディレクション 高岡一弥)		
「俳句」	ビエ・ブックス(俳句選者 高橋睦郎 写真 井上博道 ア ートディレクション 高岡一弥)		
「美の脇役」	文庫サイズにて再版・産経新聞社編	光文社	
「山頭火」	ビエ・ブックス 英訳 宮下恵美子 写真 井上博道		
「美しい日本語の風景」	淡交社 中西進著 写真 井上博道		

(有)井上企画・幅 写真事務所

〒631-0003 奈良市中登美ヶ丘2-1984-31

Tel.0742-43-9111 Fax.0742-43-9222

E-mail: ban-made@giga.ocn.ne.jp

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二回

相馬黒光との
出会いと別れ



「あら、なんとまあ、海旭先生、お懐かしゅう」
東京新宿の老舗レストラン中村屋の女主人・相馬黒光は、日曜朝のNHKラジオ番組「光を掲げた人々」がはじまり、今回取り上げられる人物の名が流れるや、そう驚きの声をあげた。そして、おもわず東の方角に向かつて合掌していた。

海旭とは渡辺海旭、明治・大正・昭和初期に活躍した仏教界きつての碩学にして高僧。黒光が手を合わせた先は海旭が住職をつとめた深川・西光寺。黒光が生涯の師と仰いだ海旭を失ったのは昭和八年だから、戦争を挟んですでに二十年あまりがたっていた。

「光を掲げた人々」は、昭和二十四年九月、戦争によって深い傷をうけた人々の心をいくらかでもふるいたたせることができたと企画された、NHKの人気ラジオ番組である。第一回めの新渡戸稲造以来、内村鑑三、板垣退助、福沢諭吉、樋口一葉、二宮金次郎、北里柴三郎、良寛、渋沢栄一など、逆境にあっ

ても敢然と生きた先達たちが分野を越えて取り上げられ、すでに五年以上もつづいている。

昭和十九年、B29の高空襲によって、若者の町・新宿の象徴的存在であった黒光の中村屋も焼失。終戦直後から営業再開のため齡七十を超えた老骨にむちをうち、女だてらに奮闘してきた黒光にとって、このラジオ番組は心の支えだった。

さて、きょうは誰かしらんと楽しみに思いながら、ラジオのスイッチを入れたところ、流れてきたタイトルが、

「新しい時代の聖者、渡辺海旭」

そこで黒光は懐かしさがこみあげ、思わず合掌していたのだった。

——海旭先生が取り上げられるとは……よくもまあ、GHQが許したものだわ。

晩年の海旭は、戦前戦中の政界・軍部に隠然たる影響力をもった行動派右翼の頭山満らと交わり、国粹主義、大アジア主義、皇室主義へと傾斜を深めていたからだ。そんな最終

経歴をもつ海旭をGHQが認めるはずがない。生きていけば「戦犯」の対象にもされかねない。

そう思ったものの、黒光は、あら私も老練りうけんしたものだと苦笑した。そうそう日本は、去年サンフランシスコ条約をもって一人前の独立国になったのだから、もうGHQにお伺いなぞたてる義理はない。それでNHKも海旭先生をようよう取り上げることができたのだろうか。だったらありがたいことだ。

しかし、番組を聞き進めるうちに黒光はまたまた思いなおした。いやいや、まだアメリカさんへの配慮はあるようだ。なんとならば、海旭の十一年にわたるドイツ留学時代、帰国してからの活躍や弟子たちとの交流がドラマ仕立てで語られていくのだが、いっかな頭山満はでてこない。頭山が熱心に支援したインド独立運動の亡命者ラス・ビハリ・ボースも登場しない。最晩年の海旭を語るには頭山満翁との付き合いを抜かずわけにはいかないのに、頭山もボースも出ずじまいのまま、昭和

八年、悪性流感による海旭の遷化せんげへと向かい、番組はついに大団円だんえんを迎えてしまった。

*

ラジオドラマであれ、海旭と再会できたことに、海旭との仏縁の深さをあらためて想った黒光だが、かえって不満はつのるばかりだった。そもそも海旭と黒光が仏縁で結ばれる媒介となったのは、頭山でありボースだったからだ。それまで海旭は宗教界で、黒光は実業界と社交界では勇名をはせていたが、お互いに交流はなかった。

渡辺海旭は明治五年東京は浅草に生まれ、書店の丁稚奉公をへて十三歳で仏門に入り、明治三十三年に二十八歳で第一期浄土宗海外留学生に選ばれてドイツへ派遣された。十一年間にわたってサンスクリット語、チベット語、パリー語を学んで比較宗教学を修めて博士号を取得。帰国後は宗教大学（現大正大学）、東洋大学で教鞭をとり学者として優れた業績を残すかたわら、宗教による労働者共済を掲

げ社会事業家としても活躍していた。

いっぽうの相馬黒光は本名、星良^{はしむ}。海旭よ

りも四歳年下で明治九年、仙台藩士の三女に生まれた。幼少より才気煥発で、キリスト教に憧れ明治女学校（現・明治学院大学）で島崎藤村に薫陶をうける。「黒光」は同校を経営する巖本善治から「才気を黒で包むように」と命名されたもので、後に本人はこれを「号」とした。同じキリスト者で長野の養蚕農家の相馬愛蔵と結婚するが、村の旧弊たる雰囲気に馴染めず上京、本郷の東京帝大前でパン屋を開業、これが人気を博し、新宿に支店を出すやこれも大繁盛。さらにレストラン、和洋菓子の製造販売に業容を拡大。この実業の大成をうけて、芸術家や文化人の交流サロン活動を主宰。そこには、木下尚江や秋田雨雀、神近市子や市川房枝のような左翼系の進歩派が数多く集っていた。さながらフランス革命前夜のブルジョア夫人によるパトロネージュを思わせる華麗な活躍ぶりだった。

黒光と海旭はともに社会的な活動では際立っていたが、片やキリスト者、片や仏教徒といふこともあって、接点はなかった。

黒光と海旭を出会わせたものの、それは黒光にとって人生最大の悲劇だった。大正十四年（一九二五）三月四日、長女の俊子が二十六歳の若さで他界したのである。

海旭先生と出会わなければ、私は悲劇に食いつぶされていたにちがいない、と黒光は往時をふりかえった。海旭との出会いは奇蹟だった。

あら「奇蹟」だなんて…。

キリスト者に先祖返りした自らに黒光は苦笑した。海旭に出会ってから仏教に帰依して今にいたっている黒光は、頭の中で「奇蹟」を「因縁」にさしかえた。万に一つに見える偶然の出会いも、因縁という必然性のほころび。まさに海旭との出会いはそれだった。

ほころびのはじまりは、右翼の巨頭・頭山満にインド独立運動の闘士のラス・ビハリ・

ボースの救済をもちかけられたことだった。

ボースはイギリス人総督を襲撃して日本に亡命してきていたが、日本政府は英国と同盟関係にあることからボースを国外追放にしようとした。そこで頭山がボースの支援と保護を相馬夫妻に頼みこんできたのである。相手は右翼、それも行動派の危険きわまりない極右だ。相馬夫妻は左翼系文化人との付き合いが深く、もちろん断ることはできた。でも、ボースの世話を引き受けた。何であえて危ない橋を渡ったのだろうか。当時を思い起こして黒光の胸中に言葉が浮かんだ。

あえていえば義侠心かしら。

幼少のころから黒光の中には女のくせに義侠心が宿っていて、事あるごとにそれが首をもたげてくるのに幾度手を焼いたことか。

次なる因縁のほころびをつくったのは、またもや頭山だった。長女の俊子をボースの嫁にと持ちかけられたのだ。英語ができる俊子が通訳としてボースの身の回りの世話を焼い

ていたこともあり、俊子とボースは親しい仲になっていた。なつてはいたが、普通の親ならそんな嫁入り話は言下に拒絶していただろう。頭山にとっては日本の実業家の婿になればボースを守ることができ、それによって頭山の唱道する大アジア主義が大きく飛躍するという思惑があったことは、黒光も承知していた。このときも俊子の背中を押したのは黒光の義侠心だった。

そして黒光の長女・俊子はボースとの間に二児をなしたが、二十六歳の若さで逝ってしまった。

ここで三つ目の因縁のほころびが生れる。このときの契機も頭山だった。海旭を葬儀の導師として推輓したのである。

かくして相馬・黒光は渡辺海旭と出会う。出会った瞬間、黒光は私はこの人と出会うためにこれまで生きてきたのだ、と直感した。あのときの鮮烈な印象はいまも黒光の脳裡に焼き付いていた。

(つづく)

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧品文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。

訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

連載をはじめるにあたって

明治・大正・昭和初期に渡辺海旭という傑物がいた。傑出した宗教家にして教育家、社会事業家。さらには詩文家にして文案家…。海旭は、秀でた僧でありながら僧をはるか逸脱・越境した多義的な存在であった。

宗教家としては、第一期浄土宗海外留学生に選ばれてドイツで11年間にわたり原語で經典にあたって比較宗教学を修め、帰国後は明治の近代化のなかで伝統仏教の再生・再興に大いなる貢献を果たした。教育家としては、母校である芝中学（現・芝中高）の校長を22年間つとめる傍ら、東海中学、宗教大学（現大正大学）、東洋大学の設立・運営にかかわり、近代化が急がれた日本のために、有意な人材を数多く育てあげた。また、近代化の矛盾のひとつである労働者救済に宗派を超えて取り組み、「社会事業」という言葉は海旭の「造語」だといわれている。さらに、数多くの漢詩をものするいっぽうで、「カルピス」の名付け親になるなど文案（コピー）の才にもたけていた。

とにかく一つの器にはおさまりきれない桁外れた人物であった。それは海旭の多岐多様な人脈にあらわれている。

新宿中村屋の創業者にして文化サロンの主宰者、相馬黒光。行動派右翼の巨頭・頭山滿。インド独立運動の闘士のラス・ビハリ・ボース。カルピスを創業した僧侶出身の三島海雲。海旭を師と仰ぎながらその偉大さに宗教家を諦めて文学の道へ転身した武田泰淳。海旭に格調高い弔歌を捧げた詩人・土井晩翠。芝中の教え子で戦後映画界を領導した映画監督の今井正などなど。

海旭は昭和8年61歳で逝って70有余年になるが、いまだ評価は定まっていなくて私には思われる。それは海旭が過去の傑物ではなく、未来の傑物であるからだ。海旭が手がけた、宗教の再生、社会事業、教育などは解決済みの「過去」ではなく、まさに我々が直面している「現在と未来」の課題であるからだ。そこに我々の現在と未来へのヒントがあるからだ。だからこそ我々の現在と未来のために、ぜひとも海旭の実像にせまってみよう、それが本連載を始めるなによりの動機である。

まずは、多岐多様な海旭の人脈の中にある多岐多様な海旭像を検証していこう。それを重ねあわせることで茫々たる海旭の像に見取り図（パースペクティブ）を定めたい。そのうえで、廃仏毀釈が荒れ狂った明治初期に生まれ、日本が国際的孤立を深め戦争へ向かう直前に逝くまでを追いつつ、渡辺海旭の実像にせまろうと思う。いささか軒差と曲折のある長丁場になるが、お付き合いをいただければ幸いである。

寺院紀行

信州佐久

西念寺

撮影／タカオ力邦彦

文／真山剛



第7回結婚奉告・新生児初拝会法要 H11・4・24

平成11年に行われた初拝会。写真右手前には新住職の奥様と赤ちゃんの三男、お兄ちゃんの姿も見える

長野県佐久市岩村田本町、長野新幹線の佐久平駅から車で約五分、岩村田商店街から少し入ったところに一行山無量壽院西念寺の伽藍が聳えている。

いきなりで恐縮ながら、西念寺の年中行事を列記してみる。

一月 修正会

四月 結婚奉告法要並初拝会

五月 仙石忌そば会

五月 藤観会

六月 お薬師祭り

八月 お施餓鬼会

十月 東京和順会

十月 子育て地藏祭り

十一月 十六会追善法要

十二月 除夜の鐘

※この他に月例の朝参りお経会、詠唱会もある。

そして昨年はここに晋山式が加わった。

平成二十年十一月八日、浄譽健昭上人の第二十六世住職就任の晋山式には、境内整備の落慶法要と元祖法然上人八百年大遠忌が併修されるといふ西念寺の歴史に残る行事になった。

さて、晋山式は後述することとして、列記した年中行事の中に見慣れない行事がいくつもある。本連載で百か寺を越えるお寺を取材



仙石忌の看板が立つ西念寺山門

してきただけに、初めて見る行事を新住職に聞かない訳にはいかない。
さっそく一見してお寺っぽくない行事を教えてください。

「結婚奉告法要並初拜会」はその一年間に生まれた赤ちゃんのご先祖様へのお披露目と結婚の報告法要（十六回目）。

「仙石忌そば会」は小諸そばを全国に広めた仙石秀久公の追善法要、特筆すべきは地元で成功した小諸そばのチェーン店「草笛」創業社長が提案され、供養法要後にはそばが振るまわれる（三回目）。

「藤観会」は近隣のお寺の観藤会（なとうかい）をうらやましく思った檀家さんが「うちでもやろう!」と始めた藤の花をめぐるお花見会（約四十回目）。「東京和順会」はかつて住職が大本山増上寺に勤務していた時にその建築の担当になった開山堂で、東京近郊の約二百軒の檀家さんと触れ合う法要と懇親会（三十六回目）。

「十六会追善法要」は岩村田城主内藤家が困窮していた時に援助を惜しまなかった十六軒の旧家だけで行う法要（多数、回数不明）。

説明を聞くとどれも興味深い。と同時にその内容や成り立ちから檀信徒さんと寺の一体感が感じとれる。「私たちの寺」、「みなさんの寺」という理想的な関係を育んできた、そう感じさせる行事である。

こうした中、新住職、東谷健昭住職の就任が盛大になるのは当然のことかもしれない。先代、迎善上人の遷化を受けての法灯継承と



檀家さんの要望で境内には藤棚が作られ、花を楽しむ藤観会が始まった

なるが、浄土宗大本山信州善光寺大本願の鷹司誓玉台下、浄土宗宗務総長（当時）であり親戚でもある稲岡康純上人、佐久仏教会、長野各地の浄土宗寺院、そして西念寺開山の发往上人ゆかりの寺などの有縁寺院、県会議員、青年会議所メンバー、そして西念寺を支える檀家総代、世話人が列席、寛延年間（江戸中期）に再建された本堂で肅々と法要が執り行われた。

一方境内では、お祝いに駆けつけた檀信徒さんやお練行列を見て新しい住職の就任を知った近所の人たちが、特別公開された山門の十六羅漢を重機に乗ってお参りし、子供たちはおもちゃがもらえるサイコロゲームではしゃぎ、寒い日にうってつけの郷土料理「お煮掛けうどん」に行列ができ、と大賑わい。ひと月前の取材時に「本堂に入れない子供たちには新しくしていただいた参道の敷石でボーリングでもして楽しんでもらおうかな」と言っていた住職の言葉が思い出された。みんなのお寺、という気持ちが強い住職なのだ。

さて、落慶法要も晋山式と併修されたが、お檀家さんから寄付を仰ぎ、客殿と庫裡が新築され、本堂脇陣や裏堂も復元整備された。

中でも徳川家將軍の位牌が並ぶ右の脇陣、そして武田信玄公の位牌を祀る左の脇陣の復元は住職の念願だったという。もし病に倒れることなくば天下統一を果たしたかも知れない武田信玄、そして艱難辛苦を乗り越え天下統一を果たした徳川家康、この後世に語り継



惣門の上には釈迦三尊と十六羅漢像が祀られている。晋山・落慶記念で特別公開された

がれる戦国の両雄の位牌を安置しなおせたことを住職は本当に喜ばれていた。それもそのはずで開基ではないものの武田信玄公なくばこの西念寺が創建されることはなかったからである。

西念寺の創建は永禄三年（一五六〇）で開山上人は炭往上人。岐阜出身で伊勢の名刹樹敬寺で修行し、多くの浄土宗の寺院を開山した傑僧だ。なんと、開山した寺院が信濃に四十か寺、甲斐に二十五か寺あるという。何もないところから初めて六十五もの寺を建立するのは難しい。おそらく協力的な後援者と有能な右腕左腕になる人物、いまでいうサポーターがいたに違いない。となると、炭往上人の後援者が武田信玄公かと思いたくなるが、そうではない。西念寺建立にあたっては、和田峠で出くわした二人が問答を交わし、信玄公が炭往上人に佐久の岩村田での一字建立を許した、と伝えられている。もともと岩村田は大化の改新時に官道が定められた頃からの交通の要衝。今でこそ新幹線が通り長野は便利になったが、それ以前は松本が信濃の国府だった。しかし、「四鄰譚藪」という書物に「民家六千軒、交易四達し、賑わい国府にまさりけり」と岩村田の方が、松本より栄えていたことが書かれている。ちなみに大井氏が岩村田城主をしていた頃のこと、千四百三十年前後である。しかし交通の要衝であることは戦場となり戦火にさらされることでもある。信濃の国は日本でも合戦の多かったところだが、その中

仙石秀久公の供養塔。西念寺には岩村田藩の五代目藩主内藤正国公、「四鄰譚藪」を著した古澤鷗山の墓もある



西念寺開山炭往上人像。信濃、甲斐に多くの浄土宗寺院を建立した傑僧だ



でも岩村田近辺に合戦地が特に多く、ようやく落ち着くのは江戸時代も元禄の頃（千七百年初頭）となり内藤藩が小諸以南を治め、岩村田宿となってからのことだという。

こうした成り立ちから東谷住職は信玄公の位牌壇を復元することを望んでいたということなのだ。

さて、東谷住職だが、山形の浄土宗寺院出身で大正大学から増上寺に勤務して二十八歳でこの西念寺に入っている。当時をこう語る。「親戚も知り合いも全く居ない所に来たのですから大変でした。知り合いを作るためにJ.Cに入ったたり、よく散歩したり。ですが、見るもの聞くものすべて新鮮ですし、岩村田や佐久の歴史、そして西念寺の成り立ちなどを調べるのは楽しかったです。その中で武田信玄公と西念寺の関係を知りました。信玄公と峯往上人あつての寺であることは強く意識しました」

佐久は寒いところで、雪は故郷山形の天童の方が積もるが、気温は佐久の方が低く、マイナス15℃位に冷え込むのもざらだという。「増上寺を辞め副住職となった二年後に結婚したのですが、相手は滋賀のお寺の娘さん。もちろん彼女にとってもこの地は親戚も知り合いも全く居ない所。そういう意味では妻はもつと大変だったと思います。でも、二人して手探りしながらようやく今日まで来られた、という感じですね」

本堂脇陣に祀られる武田信玄公の位牌。信玄公と峯往上人が出会い西念寺が建立された



十代までの徳川将軍の位牌が並ぶ本堂脇陣



奥様は滋賀の浄土宗寺院のお嬢さんで、ご尊父は善哲院住職で、昨年十二月まで浄土宗事務総長を務められていた稲岡康純上人だ。今回の晋山式では宗務総長として新命住職に紫衣特別被着許可状を渡されていた。娘婿と義父の対面、これも仏縁なのだろう。

苦勞話を続けよう。

「私が寺に入った時、檀信徒名簿がなかったのです。先代の頭の中には檀信徒全員の顔が入っているけれど、実際の名簿がなかったの、私も妻も誰が檀信徒かわからない。そこで、赤ちゃんのお宮参りを参考に初拝会を思いついたのです。生まれた赤ちゃんを両親に連れてきてもらい、結婚報告会も兼ねれば檀信徒さんの家族構成が少しずつでもわかってくる。

増上寺で結婚式の法要をしていましたから、それをアレンジして法要を組み立てました。赤ちゃんの手形をとったり、全員での記念写真を撮ったり。そして、その写真を本堂に飾っておくのです。そうすると、赤ちゃんが大きくなって『あっ、僕だ、私だ』ってそこでまた家族の会話が盛り上がる」

新しいお寺で少しでも早く檀信徒さんと触れ合えるようになって、という工夫がこの結婚奉告法要並初拝会という法要なのだ。大体毎年五、六人の赤ちゃん、四、五組の新婚さんで行なわれ、住職夫妻の結婚翌年から始めてはや十六回を数える行事になっている。



新しくなった客殿と庫裡

岩村田の南を流れる千曲川。このあたりは水に恵まれ土地も豊か、また佐久鯉も有名だ



まだ三回目という新しい行事は仙石忌そば会だ。仙石秀久公は二代將軍秀忠公の信望を得、小諸城主となった人物で、西念寺三世恵頓上人の時に墓地供養塔を建立している。その秀久が小諸そばを広めたことを知った小諸そばのチェーン店「草笛」の創業社長が、ぜひ秀久公を供養し、そばを振るまいたいと申し出たのが、ちょうど秀久公没後三百九十年目。そこで、命日の五月六日を仙石忌そば会とし、小諸そば四百食を法要後に檀信徒や近隣の人たちと楽しむ行事となった。

こうしてみると、本当にお寺と檀信徒、地元の人との交流のあるお寺である。東谷住職と西念寺の縁をとりもたれ、晋山式にも呼ばれていた東京のお寺の奥様に話を伺う機会を得た。

「それはあの方のお人柄ですよ。何があっても受け止める。その土地々々のやり方がるから出しゃばらない。

そしてお檀家さんを大切にします。こうしたことをちゃんとされてきたからこそ、今日の姿があるのですよ」

上品なものの言いながら、力強い言葉で褒めていらっしゃるのを聞き、晋山式でたくさんの方のご縁、そして多くの仏縁をいただいたお礼を真摯に述べられていた住職の姿を思い出した。

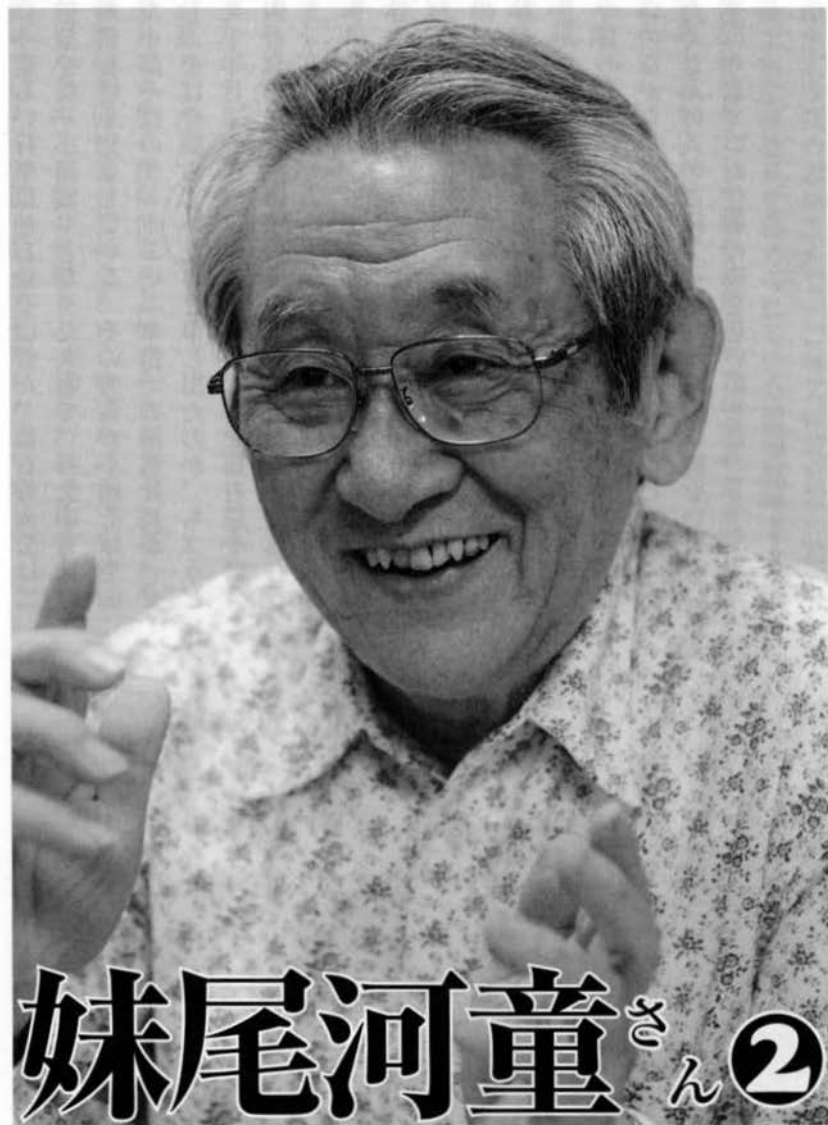
(ルポライター)



西念寺が管理する子育て地藏尊。間引きがあった頃の名残りでもある

連載

会いたい人 関 容子



妹尾河童^{さん} ②

撮影／タカオカ邦彦

河童さんは自殺未遂事件を境にして、精神的に自立したのだろう。ガードの枕木から手を離して跳び下り、海辺の砂浜に仰向けに寝ころがって、赤く染まった夕焼け雲を見上げながら、旧制中学の四年生は考えた。家に帰って、額に怪我をさせた父親に謝ろうと……。

「家の前まで来たが、すぐに入れず躊躇しながらドアをそっと開けると、ミシンを踏んでいた父が振り向いた。頭に巻いていた包帯がヤケに白く見えたのでドキンとしました。折よく母と妹は教会に行つて留守だったので、父に『堪忍して、ぼくの頭へんになつとったんや』と素直に謝れた。『ぼく今夜は友だちの家に泊めてもらう』と言うと、『そのほうがええ。当分帰つてこんでもええよ』と父も言ってくれた。身の回りの物を風呂敷に包んで出て行こうとしたら、父が呼び止めて、『これ持っていき』と小遣いをくれたので、またジーンとしましたね」

河童さんが行つた先は友人の家ではなく、

目指したのは神戸二中の校舎だった。戦時中は絵画や音楽の授業は廃止されていたので、廃屋のようになっていた絵画教室の隣の準備室に住もうと思つたのだ。

「学校の中に住むことは秘密にしましたが、絵の仲間だった小倉という友だちだけには知らせた。彼は、家から貴重な米を盗みだして持つてきてくれました。学校の中に四力月も潜んでいたのにバレなかったのが不思議です。これまでに、こんなに静かで落ちついた暮らしはなかった。絵画教室だからデッサン用の石膏像が沢山あり、選り取り見どりで自由に描けたのも嬉しかった」

河童さんが通つていた神戸二中（現在の兵庫高校）には、小磯良平や東山魁夷など卒業生の作品を展示した美術館がある。

「高校に美術館があるというのは珍しいでしょう。小磯先生の『踊り子』の絵は、あのころ校長室にあつて、見せてもらいに行ったら、『君も将来学校に絵を寄贈できるような画家

家出をし中学校の廃屋化しかけた絵画教室の準備室に住んでいた時に描いた石膏デッサン。このデッサンを持って少年だった河童さんは小磯良平画伯の家に走った



になりなさいよ」と校長先生に言われました。ぼくは画家にはならず、舞台美術家になったので、絵の代わりにジュリー（沢田研二）が主演した『ドン・ファン』の舞台模型を寄贈しましたけどね」

河童さんは、小磯良平画伯とは面識がなかったが、二中の後輩と名乗れば、デッサンを見てもらえるだろうと思いつく。

「あの神戸大空襲で、ぼくの家が焼け落ちた同じ日に、小磯先生のアトリエも焼失したので、仮住まいの家は須磨の西隣の塩屋だと聞いていました。塩屋駅の前の本屋さんで訊ねると、『本を配達しているから知っている』と教えてくれた。描いてもらった地図を頼りに、丘の上の一軒屋に向って走りました。ちょうど先生は在宅中だったので会えたのですが、紹介状もなしに飛びこんできた中学生に、驚かれたようでした。玄関の板の間にヴォルテールの石膏像のデッサンを掘げると、しばらく黙って見下ろしていて『ぼくは弟子をと

らないんだが、いつでもおいで』と言ってくださった。次に来る日を約束して、玄関の戸を閉めると、嬉しくてたまらず『ワー』と叫びながら、駅まで駆け降りました」

河童さんは、小磯画伯に氣にいられたのか、更なる幸運に恵まれる。空襲でアトリエを失った画家たちが、芦屋で焼け残った伊藤藤雄画伯のアトリエに集まり、裸婦のモデルを囲んで描いていたが、その中に参加させてもらうことが出来た。モデル代の会費も小磯先生もちで。

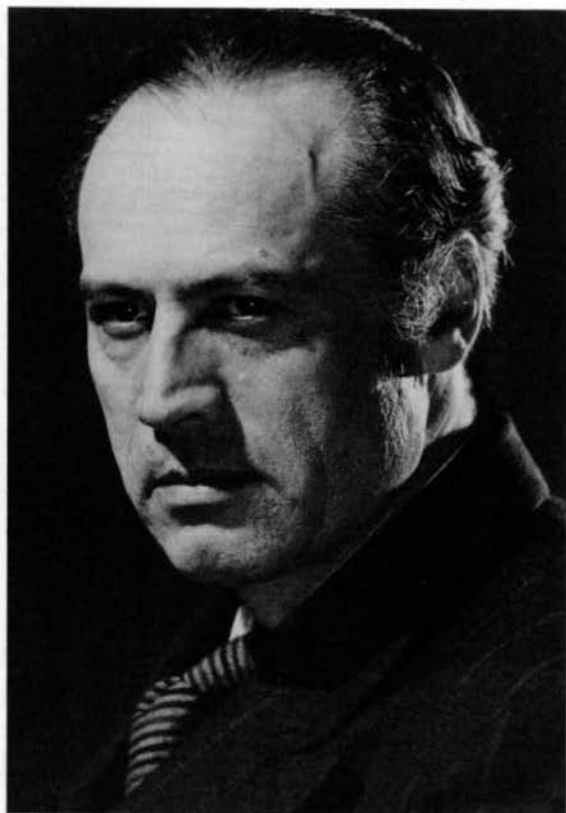
「集まっていたのは田村孝之介、藤井二郎、児玉幸雄という高名な画家たちでした。でも、ぼくは同じような描き方をするのに飽きてしまつて、周りの大先輩の画風を次々に真似て描くことを面白がりました。皆さん『よく似せるもんだ』と笑っていましたが、本心は不愉快だったかもしれません。小磯先生は困った奴だなと思われたのか、ある日、『君は、商業美術のほうに向いているかもしれない

ね。一回ごとに違う絵が描けるし、これから面白くなる分野だと思う』と言われ、卒業と同時に『フェニックス工房』という看板屋で働けるように紹介してくださった。そこは奥村隼人という人を中心に、画家たちが集まつて作った看板屋でした。実にユニークな看板屋でね。毎週月曜と木曜の夜はペンキの缶や看板を片づけ、裸のモデルを囲むアトリエに早変わりしていました。約束してくれた給料はもらえなかったけど、看板やポスターに書くレタリングを、働きながら覚えることができた。それが後に役にたったのですから、人生に無駄な苦労というのはありませんね」

2年半後、河童さんは大阪の『朝日会館』という劇場の宣伝部のデザイナーになる。

「河童」と呼ばれるようになったのも、この朝日会館時代だった。

「朝日会館の近くのバーで、飲めもしないのに、ぼくも毎夜のように遊んでいました。ある



河童さんと初めて出会った頃（昭和二十年代半ば）の藤原義江さん。「我尊テナ」と称され、歌声も素晴らしいが、女性にモテまくっていた

日、突き出しに菊の花の漬け物が出た。ぼくは『えっ菊が食べられるの？ だったら、このバラや百合も食べられるかな？』と言うと、

編集長の齋藤寅郎さんが、「かねがね人間じゃないと思っていたが、とうとう正体を現したな。こいつは河童だぜ！」と言った。それ以来『河童』としか呼ばれなくなってしまったんです」

マダムも友人も『それは絶対に無理』と大笑いした。ぼくは、『絶対に無理』と言われると、やってみたくなる悪い癖があったので、カウンターの上や壁際の花瓶から、手当たり次第に花びらを千切って口に入れました。一時間ほどすると物凄く腹が痛くなった。あまりの激痛に床を転げ回って呻いているのを、高いカウンターの椅子から見下ろしていた『航空朝日』

その朝日会館時代に、生涯の恩人と慕う藤原義江との出会いがあった。河童さんは二十一歳。藤原さん五十三歳のときである。

「朝日会館は劇場だったので、音楽会や演劇、オペラなどさまざまな物が上演されていました。そのボスターやパンフレットのデザインをしていたのですが、印刷原稿とは別に一枚だけ手描きの原画を、ロビーに個展のように並べて悦にっていました。オペラ『夕鶴』のときは墨絵で日本画風に描いたり、オペラ『ラ・ボエーム』は、パリの屋根裏に住んでいる若い芸術家たちの物語なので、油絵で裏街の路地に雪が積もっている絵を描きました。大阪公演の打ち合わせで来ていた藤原義江さんがその絵を見て、『これ誰が描いたの?』と言うことで呼びだされ、会うことになったのです。当時、藤原義江と言えば、『我等がテナー』と呼ばれ、オペラを観たこともない人にも名前と顔が知られている大スターでした。父親はスコットランド人で、母親は

下関の芸者の間に生まれたハーフで、抜群の美男子でしたから、艶聞が断えない人でしたね。藤原さんは、よくに『君、このボスターの中からオペラのアリアが聴こえてくるようだね』と言いました。ぼくは嬉しかったのですが、『うまい誉め方をする人だなあ。こんな言葉で女性を口説いているのか』と思いました。

それから二カ月後、再び会館に來られた藤原さんに『君いつそ東京へ出て来ないか』と言われたのに驚きながら、生意気な若造は、『そんなことを若い者に簡単に言っているんですか? 出てこいと言われるからには住む所の面倒もみてやるということですか?』と聞きました。すると『ああいいよ』だったのには、また仰天しましたね」

藤原さんは、あき夫と息子の義昭さんと共に、赤坂の歌劇研究所の二階に住んでいた。河童さんは、二カ月後に上京し居候になる。



1954年、6月。オペラ『トスカ』の舞台美術デザインを急に描かされて、本人もその唐突なデビューに戸惑った。舞台美術家になろうなどとは夢にも思っていなかったから、『トスカ』一作で終わる筈だった。ところが次々と芝居、バレエ、オペラなどの依頼が続き、気がつくや『舞台美術家』になっていた。そして困ったことに、無収入の超貧乏になっていた。当時は、デザイン料など払ってくれなかったからだ。そのくせ新聞、雑誌の取材が殺到し『彗星のごとく現れた舞台美術家』などと、驚いた感じの記事を書かれていたが、一番驚いていたのは本人であった

と間にあわせましたが、不安でしたね」

「それが、とんでもない居候でね。電話番号もせず、藤原さんのカバンを持つこともなく、よそから頼まれた音楽会や芝居のボスターなどを描いて稼いでいました。二年半たったころ、藤原さんに『トス力の舞台装置をデザインしてくれないか?』と唐突に言われたのに呆れて、『藪から棒に何を言われるんですか、ぼくは舞台のデザインはしたことはありません』と言うと、『チャンスは藪から棒に決まってるんだ』と珍しく真剣な顔で言われました。藤原歌劇団の舞台美術は三林亮太郎という巨匠が担当しているのに、いったい何があったのか? と、事務所に聞きに行くと、デザイン料の不払いが続いていたので、三林先生にトス力を降りと宣言されたらしい。困った藤原さんは窮余の策として、ぼくに描けと言ったのだと判りました。そうと知っては、居候の恩返しのためにも断れない、と覚悟をしました。公演の日は二週間後に迫っていたので、三日三晩一睡もせず描きあげ、やつ

河童さんのこの舞台美術デビューは、本人の不安をよそに大成功を収めた。当時『人斬り銀二』と呼ばれ、辛辣な音楽批評で恐れられていた山根銀二という人が、東京新聞で『トス力』の舞台を誉めたのだ。ラジオ番組でも、宮澤縦一さんが『デビュー作とは思えない』と絶賛していた。

「トス力の一作だけで舞台美術はやめるつもりだったのに、誉められると決心が揺らぎました。『豚も煽てりや木に登る』と言います。河童も登ります。デビューの年に四本。翌年は十一本も描きました。舞台美術家になるには、師匠に教えを乞い、十年ぐらい修業をして、やっと一本立ちできる世界だから、たった二週間で飛び出してきた若い奴に、先輩たちが頭に来たのも当然です。『出る釘は打たれる』で、ボコボコに打たれました。でも数年後には打たれなくなりました。『出すぎた釘』は打ちにくいらしいです」

(つづく)

江戸を歩く

第二十三回

森清鑑

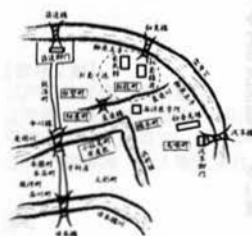
大江戸ウォーカー

白壁町

日本橋を渡り、目抜き通りを北に歩くと、左手に越後屋、そして室町、十軒店、本石町を抜け、竜閑川に出る。川に架かる小さな橋が今川橋。辺りは瀬戸物屋が多く、橋詰めには広場があり、家々が続いている。次の角から右を眺めると、遠く屋根にはためく、紺屋町の染め物浴衣地が見える。紺屋町に隣接して北側に白壁町がある。ここに平賀源内（一七二八―一七八〇）が住んでいた。本命は本草学者（薬学、博物学）であるが、源内の活動は、実に多方面に及んでいる。作っては、量器（万歩計）、タルモメイトル（寒暖計）、火浣布（アスベストを使った防火布）、エレキテル（摩擦静電気発生装置）、作陶の源内焼き、女性の髪を飾る菅原櫛などなど。行動では、鉾山開発、土木事業（荒川に水路を造る計画など）、物産会（博覧会）の開催。書き物では、大当たりを取った、浄瑠璃「神靈矢口渡」などなど。油絵では「西洋婦人図」。言ってみれば本草家、発明家、文芸家、陶芸家、画家、

起業家、鉦山家の顔を持っている。発明や事業は、江戸中期のこの時代、実用化、事業化で頓挫したものが多く、他の面でいくつか後世に残すものがある。まずは日本で初めて博覧会を創始したことにある。全国からめずらしい物品を集め、展示したこの物産会を彼は数回プロデュースしているが、いずれも成功している。一七五九年江戸湯島で開催された物産会では全国の「草木、鳥獸、魚介、昆虫、金玉、土石、薬品」など千三百余种が集まったという。テレビのない時代にどのような告知したのであろうか。彼は全国に張り巡らされた俳諧のネットワークを利用したのである。十八国二十五人に産物取次所を依頼、引札(広告)を配って告知した。運賃江戸払いの郵送で集め、必ず返却の信用状を出す。そして出品物を克明に記録し、書画で顕した。「物類品隲^{ひつ}」六卷、「会業譜」など。源内は紀伊、相模などの海岸で貝を収集し、貝の百科事典とも呼べる「五百貝図」を作っている。長崎で得た西洋画の陰影法・遠近法の手法を

秋田鉦山指導の際、小田野直武に教える。小田野は江戸に出てかの有名な「解体新書」の挿絵を描いた。杉田玄白は親友で回想録「蘭学事始」には源内との対話に一章を割いている。菅原櫛(源内櫛)は伽羅の香木と象牙を素材に櫛の背に銀細工、絵模様を施したもので、家内工業で生産、販売。高価であったがよく売れた。源内の全くのオリジナル品である。吉原の花魁にこの櫛をつけさせデモンストレーションしたという。金唐革細工。金唐革はヨーロッパ伝統のなめし皮に合金箔貼り、塗料塗り、金型プレスで文様、彩色。メデイチ家の庇護で発展し、壁張り、本の表紙に使われた高級素材である。源内は皮の代わりに和紙を使い、浮世絵版画の手法を用い、漆を塗り制作。これは湿気に弱く、広く流布することにはならなかったが、それでも自宅で壁紙用などに生産し、生活を支えることになったようである。この他に羊を飼育し、羅紗(ウール)織りに挑戦している。金唐革紙は一八三〇年代に紙企業に取り上げられ、明治にな



◆江戸散歩古地図

って大蔵省印刷局を巻き込んでの輸出品に、また、羅紗は後年、幕府が製絨所を作ることになる(田中優子「江戸の想像力」)。源内はコピー・ライターの元祖で、歯磨き粉のコピーや鰻の「土用の丑の日」のキャッチ・フレーズを作ったとされている。著名な浮世絵師、鈴木春信は同じ白壁町の住人。源内との交わりも深く、彼は浮世絵の興隆に手を貸している。この破天荒な人生は失敗、挫折の固まりであるが、その好奇心の旺盛なこと、常に己の発想を具現化、物象化することに費やしたエネルギーには頭が下がる。最後は神田橋本町(馬喰町初音馬場の近く)の自宅で誤って人を殺め、小伝馬町送りとなり、ここで牢死した。杉田玄白らの手により葬儀が行われる。玄白は述べる。「嗟非常人、好非常事、行是非常、何死非常」あなたは常識にとらわれぬ人、常識では考えられないことを好み、行った。しかし、死ぬときくらいは畳の上で普通に死んでもらいたかった)。源内の才能に驚嘆し、その死を惜しむ気持ち伝わってくる。

お玉ヶ池

白壁町を東に歩き(紺屋町方向)、北に転じるとお玉ヶ池である。紺屋町、松枝町(まぎれ)の間には小さな藍染川が割って入り、この一帯に、江戸以前の中世においては、大きな池があった(その頃は、池の周囲に桜が多く、桜が池といった)。大体、平川から北、人形町辺りからは、湿地帯であったが、埋め立て工事が行われ、内神田の町が形成され、池は江戸時代にはすでにお玉ヶ池跡となっており、玉池稲荷(現在お玉稲荷)がその痕跡を留めている。藍染橋を渡って北にちよつと行くとお玉ヶ池跡。左手に市橋下総守上屋敷がある。この屋敷に隣接した西側に幕末三大道場の一つ、千葉周作の玄武館があった(元千葉小学校跡)。彼は当初日本橋北詰の品川町に道場を構えたが、手狭になったのでこの地に移転した。北辰一刀流、玄武館の名声は江戸にとどろき、三十余りの藩から藩士が集まり、全盛期には門弟三千人を数える。千葉周作は、剣技実力もさることながら、人格者であった。玄武館四天王を育てる



◆江戸名所図会 藍染川風景 紺屋町風景。この小川で染め物を洗った。



◆江戸名所図会 今川橋の図。下に流れるのは電

とともに、門下から山岡鉄舟、清河八郎、坂本龍馬（桶町千葉道場）らそうそうたる人材を輩出している。新撰組の藤堂平助、山南敬助、伊東甲子太郎、吉村貫一郎らもここに学んだといわれる。玄武館の特徴は、まず技術を追求した合理的な教授法にある。竹刀・防具を用いたの実戦訓練、小太刀で型の訓練、そして組太刀の伝授。「剣術六十八手」は現代剣道の礎となっている。もうひとつは段位を簡略化したことである。一般にどの道場も八〜十の段位を設定している。時間も金もかかる。これは今日でも様々な武術の道場でもいえることである。貧乏な人は実力があっても昇段しにくい。周作が設定した三つの段位は早い者は五年で到達。他道場では考えられぬ事である。儲け主義ではない玄武館の面目躍如たるものがある。それでは玄武館で学んだ者達の実力がないかといえどもない。周作の技術の教えは懇切丁寧を極め、合理的である。道場の隣に儒者東条一堂の「瑤地塾」があった。周作は東堂と親しい。そこで門弟に朱子学の合

理精神を大いに学ばせた。玄武館に人が集まるわけである。子供にも恵まれた。ところが何としたことか、周作隠居・没後、皆、夭折したのである。特に次男の栄次郎は千葉の小天狗と呼ばれた剣の天才であった。十八、九歳で当代の達人と試合して九割もの勝率を誇った希代の名剣士であった。しかし、彼も文久二年に三十歳の若さで没してしまった。そして栄次郎の高弟達が明治以降、県警や全日本剣道連盟を指導していくことになる。明治十六年、山岡鉄舟ら玄武館旧門弟の支援により、栄次郎の遺子、周之助が神田に玄武館を再建、その後も警視庁剣道の世話係として活躍した。もうひとつ。松枝町の南に接して流れる、細長い藍染川南沿いに川路聖彬の拝領地がある。蘭医、伊東玄朴らはここに文久元年（一八六一）種痘所を開設した。これが西洋医学所となり、緒方洪庵や松本良順に受け継がれ、維新後、神田川和泉橋北の藤堂和泉守屋敷跡に移転、大東東校となり、さらに明治八年本郷台に移り、東京帝国大学医学部となった。

◆江戸名所図会 お玉ヶ池故事 江戸以前のお玉ヶ池近辺地図



【参考文献】

江戸名所図会 角川書店
江戸明治東京重ね地図 中川恵司編
平賀源内 糸川英夫 ダイアモンド社
江戸史跡事典 新人物往来社

世の中では、種々莫大な富を得ても、酔わず、なまけず、愛欲にふ
けらず、生ける者どもに対して過ったことをしない人々は少ない。
ところが世の中では、種々莫大な富を得て、酔い、なまけ、愛欲
にふけり、生ける者どもに対して過ったことをする人は、さらに
多い。

(『相應部經典』)

※本稿に引用した經典の訳文はすべて春秋社刊
『中村元選集2 原始仏教の社会思想』によった。

あればあったで

もしかしたら本誌を、「ビッグなお年玉」を手にし、ほくそ笑みながら繰っている方もいらっしゃる？としたら、どうぞお気を悪くなさらずに。

テレビの時代劇を見ていると「富くじ」が出てくることがある。江戸時代、社寺の修理事業資金を集めるためにお上公認のもと行われたという、一種の賭博だ。富札(番号札)を購入、抽籤は箱の小穴から、中に入っている番号札を錐で指していたという、そういえば現今の宝くじ(年末ジャンボ)は暮れも押し迫った大晦日の昼過ぎ、ダーツのように当選番号を決めていたつけ。

現在の宝くじは昭和二十三年、地方自治体への資金繰りのため政府が定めた法律のもと行われるようになった。平成十八年度の売上高、なんと一兆九三八億円。近年は種類も豊富になり、人気は上昇の一途とか。わずかな投資でしばし夢を見させてくれ、うまくいけばそれは新年を待たずして正夢となり、今日から人生薔薇色……とも限らない——そんな教訓を与えてくれたテレビ番組をしばらく前に観た。

登場していたのは一億円当選者の中年男性。「彼の歳だと、年収五百万として……二十年分！」などと、瞬時に計算して嘆息を漏らした自分に嫌気をさしつつも、興味深く観てしまった。大金を手にした某氏、会社を辞め、海外旅行、

飲む、打つ、「買う」まで揃っていたかどうかは失念）の華やいだ？日々を送ることになる。それまでのパツとしない毎日が嘘のように変貌した。

が、はち切れんばかりだった財布に木枯らしが吹き始めるまで、そう長い時間とはかからなかった。かといって、もはや奔放な生活に軌道修正をかけることもできずに日常は窮する一方。ん？どこかで聞いたようなストーリーではないか。芥川龍之介の小説『杜子春』だ。仙人と出会って金持ちにしてもらうが、浪費がたたって没落。これを何度か繰り返す青年と某氏とが重なると言っては失礼かもしれないが、しかし実際似ている。

たたみかけるようで恐縮だが、ある意味、わかりやすいのである。人間の本質が顕現した典型的パターンと言えよう。おそらく、彼は正直なのだ。

釈尊ならどう感想を漏らされるかと、幾冊かの本や経典を開いてみた。初期の経典には当時の経済倫理に言及しているものがあるからだ。

インド思想・原始仏教の権威中村元氏は、さまざまな初期経典のつぶさな検証結果、一般の人々の経済生活について仏教は、財の集積は人生の望ましい目的の一つと捉え、営利追求のために各人が真摯に職務に励むことを奨励していた、と分析されている。

手に入れた財産の半分を仕事の資金に、残る四分の一ずつを衣食、貯蓄に充てよ、といった具体的な使い方の示唆まで見えるのは面白い（『善生子経』）。

もちろん釈尊はただし書きを忘れない。

おびたしい富あり、黄金あり、食物ある人が、ひとりおいしいものを食べるならば、これは破滅への門である。（『スッタニパータ』）

バラモンよ、得た財の出る門が四つある。婦女に惑溺することと、飲酒に惑溺することと、賭博に惑溺することと、悪友・悪い同輩・悪い仲間のあることとである。（『増支部経典』）

小生は決して彼に妬み（ねたみ）を持つものではない。ささやかな経験のもと、「ギャンブルには不適正」との自己診断はずいぶん前に完了しているから、恥ずかしながら宝くじは一度も購入したことがないが、それを理由に彼を蔑むつもりでもない。人間の素顔の一部を、大切な自己の人生を賭して大勢の人々に見せてくれたことに、感謝しこそすれ。

番組の最後、スタッフから心境を尋ねられた彼の答えが印象的だった。

「でも……また当たりたいです」

彼はやはり正直である。

（小村正孝）

浄土門主

総本山知恩院門跡第八十七世

坪井俊映

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山清浄華院

法主 伊藤唯眞

執事長 吉川文雄

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六、十七、十九

大本山増上寺顧問
浄土宗大願寺住職

神谷英敏

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二

函館 称名寺

〒040-0655 函館市船見町十八、十四
電話 〇一三八 (二三) 〇五七四

謹賀新年 平成二十一年

學大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174 866 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長

麻生諦善

淑徳S.C中等部・高等部

校長

川添 崇

塩竈市
雲上寺

東海林 良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844 1411 嬉野市塩田津中町

善哲院

稲岡康純

弘経寺住職

金田進徳

〒302 0023 茨城県取手市白山二・九・二八

吞龍上人祈願所

十八親林霊場会

蓮馨寺

住職

糸原恒久

〒350 0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二二)〇六七六

養運寺

田中光成

〒194 0032 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107 0062 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三(三五八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

鶏頭山安樂寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)一三六〇

宗源寺

齋藤价洲

〒110-0015 台東区東上野五・一・六

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三
電話〇四八(五四)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪府天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七)〇四四四

白本尊阿弥陀如来

静岡 宝台院

住職 野上智徳

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二・一六・二二
電話・〇二六六(五二)一九七〇
FAX 〇二六六(五二)三四四六

〒112-0002 東京都文京区

小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如来

極楽山 西方寺

〒989-8213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(三九九)二〇一一
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: sahouji@johg.or.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0003 世田谷区奥沢七、四一、三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、二二

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、二、二八
電話 〇四六七 (一一) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (一一) 五〇五一

横浜

大光院

www.daikoin.com

天光院 老衲

真野龍海

<http://www.evam.re.jp/tenkoin/ryumano@nifty.com>

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、二一、八

光取寺

大室了皓

〒141-0001 品川区上大崎一、五、一〇
電話 〇三 (三四四一) 八三八四

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●茸

〔特選〕毒茸の彩あざやかに通り雨

石原

新

毒茸といっても、実に多くの種類があるよ
うだが、この句のあざやかな色というのは、
毒茸らしいものと言えるだろう。木の株にで
も開いているのだろうか。通り雨がそのあざ
やかさを引き立てている。

〔佳作〕天然の舞茸子より届きけり

仲居来て焼き松茸を薄く削ぐ

茸飯一汁で足る老いの夕

金谷 友江

光田 亜紀

浜口 佳春

●露

〔特選〕小走りに露地行く猫や夕時雨

西井

正

寒々とした空が、夕べになるに従って曇っ
てくると、ついに時雨になった。雨に濡れな
がら、猫が小走りに露地を行く。猫が小走り

にという表現は珍しいが、ここが時雨を一層
うつつとしいものになっている。

〔佳作〕 急がずに渡る小橋や露律

河合富美枝

運動会間近の露地を子等走る

村上 青女

散歩みち犬が紙めゆく草の露

野村多加子

●自由題

〔特選〕 亡き母を偲ぶ夜なべの鯨尺

中村 真一

この頃、曲尺の鯨尺のと言っても知らない
人が多かるう。この句、鯨尺だから和裁のほ
うである。物差しは母の使っていたもので、
これを使うと若い頃のことを浮かんでくる。
秋の夜は長い。

〔佳作〕 立冬の月皓々と利尻富士

工藤 浄真

秋拾祖母の縫いたる黄八丈

山田 至

網小屋の錆びし錠前石路の花

寺下 忠至

読者の声

誌上句会〈編集部選〉

■茸

品書きに茸料理の増えにけり
月山の遠嶺はるかに茸飯
煎じれば妙薬となる猿茸
秋深くぞろりしめ茸山の華
しめじ茸かたまりあつて背くらべ
朝市や色とりどりの茸盛る
食べられる茸か祖父に聞くばかり
眠り込む車窓に茸の籠吊るし
ぐつぐつと深き色して茸汁

中島富士子
河合富美枝
佐藤雅子
工藤浄真
山口信子
井村善也
嶋田九弦
大友孝司
斎藤録郎

■露

露寒や母に似し人児を連れ
別院は山裾にあり露けしや
露の間の手捌き速き雪囲ひ
里芋の葉に銀白の露ひとつ
弔間を短く終り露の径
朝露の市に南瓜を並べをり
露天風呂までは夜露に濡れる足

中島富士子
金谷友江
工藤浄真
斎藤雅雄
増田信子
金子ミサ子
仁科祐輔

■自由題

秋深し仰ぎて五瓜の天井絵
雨音のとぎれとぎれに残る蟲
綿虫や看取りの日々の暮れそめて
単線の駅舎仄めく柿のれん
義仲寺の塚守久し破芭蕉
理髪師は動かぬ鯉を見ていたり
柿日和明るい方へ歩いてく
野紺菊海へのバスが左傾して
石段の三段上の銀杏かな
ななほんの威風堂々たる甘蔗
一斉にお替りの声栗御飯
一族で空理め尽くす大銀杏
大銀杏むかしの風が吹いてをり

金谷友江
河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
當間アサ子
山口東人
山内桃児
浜野具円
狭山 掉
斉田 仁
滑川幸恵
小林苑を
村松芳郎

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

焚火
時雨
自由題

締切・二〇〇九年一月二十日
発表・『浄土』二〇〇九年三月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。
● 特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねネ...

57 かい日

かまち♡ふろう



鳥鳴いて寺の窓にも初日さす

岱潤

法然上人八〇〇年御遠忌まであと二年となった。各本山では建築や修理が本格化し、各地でお待ち受けの行事も開催されるようになってきた。

しかし日本を始め世界の情勢は、経済の落ち込み、テロによる事件の頻繁化、犯罪の凶悪化など暗くなるばかりだ。五木寛之氏は現代を平安後期、正に法然上人の時代と似通っていると仰っている。貴族と庶民の格差が拡大し、京の賀茂川には飢餓でばたばたと死んでゆく人の死体が累々とし、盗賊、夜討ちが頻繁化し、庶民は救われない正に地獄図の中にい

た、その時代である。

しかしその時代の中の庶民にはまだ宗教に頼る、救いを求める手だてがあった。そこに一丈の光があり、法然上人がクローズアップされた。

しかし現代はどうだろう。庶民の中にはオウム真理教事件以来、宗教に対する信頼は全くなき、もはや救いを求める対象ではなくなってしまうと五木氏は言う。宗教家は今こそ真剣に事に対処し、誠実にならなければ、それこそ次世代からは相手にされない物になってしまいうだろう。遺産にあぐらをかいている時代はもう終わったと理解すべきだ。そうした意味で僧侶の資質が問われているの

が現代である。八〇〇年遠忌を前に、先ずは我々一人ひとりが襟を正し、自らの宗教者、仏教者としての自覚を問うて、おして行く事に心がけたい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻 一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年十二月二十日

発行 平成二十一年一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・三五七八・六九四七

FAX 〇三・三五七八・六九三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安樂寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
肱博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

法然上人鑽仰会の

本

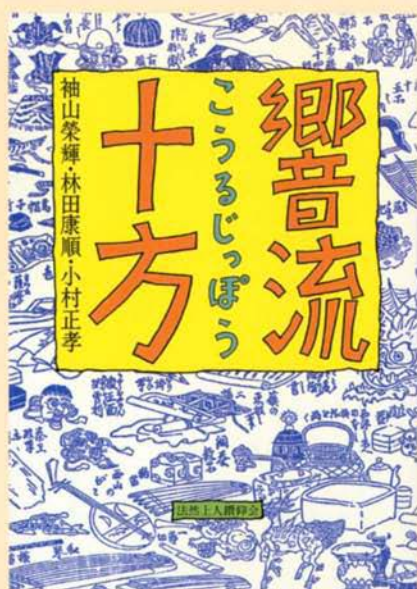
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

にくげんしょうてつ
肉眼清徹

肉眼清徹にして
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

科学の力を借りると、
新鮮な感銘と発見がある。

百済観音は、スラリとした優美なお姿で、左手に水瓶をやわらかくはさみ持つ手つきは惚れ惚れします。法隆寺のこの仏像は飛鳥時代（七世紀前期）第一級の国宝で切手の図柄にもなりました。

ところで、百済観音は、実は観音ではなくて、仏教的宇宙を象徴した虚空蔵菩薩です。この仏像と光背を科学的に分析し、原型の形と色を立ち上

げた映像には目を見張ります。菩薩は目の大きい現代のお顔。光背は中央に水紋を表す同心円と周囲を火炎が燃え上がる造型を組み合わせたもの。宇宙を象徴した飛鳥時代人の構想に敬服します。科学の力を加えて、肉眼で別の角度から拝する新百済観音は魅力的です。